

集団同一視および行動価が内・外集団の行為者に対する 態度および印象に及ぼす影響

大和田 智文*・渡野邊 真也**

要 約

近年、外集団に対するヘイトスピーチが深刻な社会問題となっている。こうした社会問題を踏まえ、本研究では、集団同一視の程度と行動価の違いが、内集団または外集団の行為者に対する態度および印象評定にどのような違いをもたらすかを検討した。その際、大学生81名（最終的な分析対象は男性48名、女性23名）を対象に質問紙調査を行った。本研究では、集団同一視、所属集団（内集団 vs. 外集団）、行動価（援助行動 vs. 恐喝行動）を要因とする3要因参加者間計画を用いた。検討の結果、行為者に対する対人場面およびSNS上での肯定的・否定的態度および印象評定に、集団同一視および行動価による違いがみられたが、行為者の所属集団（内集団 vs. 外集団）による違いはみられなかった。このことは、外集団に対するネガティブな態度の顕在化が、評定者自身の所属集団への同一視の程度と関連して生じている一方で、行為者の所属集団が必ずしも関連しているわけではないことを示唆する結果といえる。したがって、ヘイトスピーチといった外集団に対するネガティブな態度の顕在化の検討に際し、今後はさらに評定者側の特性（たとえば、個人志向性 vs. 社会志向性など）に着目する必要があるものと考えられる。

キーワード：社会的アイデンティティ理論、集団同一視、内集団、外集団、ヘイトスピーチ

問 題

現代社会におけるヘイトスピーチの問題と 内集団バイアス

現代社会において、ヘイトスピーチが深刻な社会問題の一つとなっている。ヘイトスピーチは、対人場面において直接的に、あるいはインターネットやSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などを媒介して拡散されており、社会に蔓延している（橋内, 2018; 市川, 2015）。ヘイトスピーチとは、法務省（2019）によれば明確な

定義はないものの、デモやインターネット上で、特定の国の出身のりびとを、その出身であることのみを理由として行われる、一方的な排他行動や加害行動を指すものである。

このように、自身の所属する集団と異なる集団である在日外国人に対し、否定的な感情・態度を持つ解釈として内集団バイアスがある。

杉浦・坂田・清水（2005）によると内集団バイアスとは、自身の所属集団（内集団）に対して、その他の集団（外集団）よりも有利になるよう、評価的・情動的・行動的な反応を示す傾向のことであり、実験場面や現実場面など、様々な状況で生じることが確認されている（cf. Hewstone, Rubin, & Willis, 2002）。

また、縄田（2013）は内集団バイアスには、内集団成員をポジティブに優遇・ひいきする「内集

2021年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科准教授 社会心理学・青年心理学

** 江戸川大学 人間心理学科 2019年度卒業生

団ひいき」の側面と、外集団成員をネガティブに蔑視・攻撃する「外集団差別」の側面の2種類の側面があるとしている。

この内集団バイアスの考え方に基づくならば、現代社会におけるヘイトスピーチでは、おもに日本国籍を持つ人が内集団、在日外国人などが外集団に相当すると考えられる。

社会的アイデンティティ理論と 内集団バイアス

杉浦他(2005)によれば社会的アイデンティティ理論を用いると、この内集団バイアスの発生を以下のように説明することができる(cf. Tajfel & Turner, 1979)。

柿本(1997)によれば、社会的アイデンティティとは「社会的集団ないし社会的カテゴリーの成員性に基づいた、人の自己概念の諸側面、およびその感情・評価その他の心理学的関連物」と定義される(cf. Turner, 1987 蘭・磯崎・内藤・遠藤訳1995)。

また柿本(2001)によると、社会的アイデンティティ理論では3つの原理が働くとされている。第一に、人は、肯定的な社会的アイデンティティの獲得と維持に努める基本的欲求を持つこと、第二に、肯定的な社会的アイデンティティの大部分は、内集団と外集団との間で行われる内集団に有利な比較に基づいて得られること、そして、第三に、社会的アイデンティティが不満足なものである場合には、内集団を去り、より肯定的な別の集団に入ろうとするか、あるいは、内集団をより肯定的なものに変えようと努めることである(cf. Hogg & Abrams, 1988)。

すなわち、社会的アイデンティティ理論によれば、人は肯定的な社会的アイデンティティを得ようとする基本欲求を持ち、その方法として内集団にとって有利な比較を外集団との間で行う。その過程において、内集団もしくは内集団成員を好意的に、外集団もしくは外集団成員を非好意的に扱うことが予想される(Tajfel & Turner, 1979)。したがって、内集団バイアスは、肯定的な社会的アイデンティティを得るための自己高揚方略のひ

とつと考えられる(柿本, 1997)。

たとえばホッグ(Hogg, 1992 廣田・藤澤監訳1994)は、内集団バイアスの例として、内集団に対しては外集団よりも肯定的に評価できるものを見つけようとするため、結果的に内集団の失敗は忘れても外集団の失敗は覚えているという現象を報告している。

また、この時の失敗の原因は内集団か外集団かによって帰属のさせ方が異なる。すなわち、内集団の場合は環境などといった外的要因に、外集団の場合は努力などといった内的要因に帰属されやすいことが指摘されている。そして、このような作用によって、時には外集団に対する差別や偏見を生む可能性もあるという(cf. 山岸, 2011)。

このことから、ポジティブな事象に対しては内集団がより肯定的に、ネガティブな事象に対しては外集団がより否定的に評価される可能性が考えられる。

また、池上(2014)によると、内集団への脅威が外集団への否定的態度を引き起こし、この態度は所属集団への自己同一視が強いほど顕在化されやすいことが指摘されている。これは、所属集団に対する自己同一視は、内集団への忠誠と献身を生み出す原動力となる一方で、外集団または外集団成員への差別的態度を引き起こす原因にもなるからであるとしている(cf. Riek, Mania, & Gaertner, 2006)。

このことから、社会的アイデンティティ理論に従えば、内集団に対する同一視が高い者はそうでない者に比べ、内集団バイアスがより強く働き、その結果自身の所属集団である内集団をより肯定的に、外集団をより否定的に評価すると考えられる。

社会的アイデンティティ理論からみた ヘイトスピーチにおける課題

以上より、冒頭に示したヘイトスピーチは、言い換えれば外集団の成員に向けられた内集団バイアスの原理に基づく言語的行動であると考えることができる。よって、本研究では、ヘイトスピーチの発生を社会的アイデンティティや内集団バイ

アスの視点から検討することで、人びとが外集団に接しうるさまざまな事態において、外集団に対するネガティブな態度の顕在化が、社会的アイデンティティの程度や評価対象となる行動の違いなど種々の条件によって異なるか検証することを目的とする。このことは、ヘイトスピーチに代表されるような外集団に対する諸現象のさらなる解明にもつながるものと考えられる。したがって、国際化の進む現代日本における人間理解にとって、本研究の視点は重要であると考えられる。

本研究の目的

本研究では、具体的には、社会的アイデンティティの指標として所属集団への集団同一視の程度を測定し、その程度の違いが内集団または外集団成員の行った同じ行動（社会的に好ましい行動、もしくは社会的に好ましくない行動）の印象評定にどのような違いをもたらすかを検討する。またヘイトスピーチが対人場面において直接的に、あるいはSNSなどを媒介して拡散している現実にも着目し、当該行動に対する対人場面およびSNS上での肯定的および否定的態度の違いが生じるかについても検討する。

本研究における仮説は以下の通りである。集団同一視が高い場合に内集団バイアスが強く働くことで、内集団の行った好ましい行動をより肯定的に評価し、外集団の行った好ましくない行動をより否定的に評価する。

方 法

調査対象者

2019年7月下旬に、江戸川大学に在籍している大学生81名を対象に、授業終了後の教場において質問紙調査が一斉配付により実施された。80名の回答を得たが、このうち1名の回答に不備が多くみられたため分析より除外した。また、現在までもっとも長く居住した都道府県（後述）が関東地区および関西地区のいずれにも該当しなかった8名（各条件2名ずつ）も分析より除外した。その結果、有効回答者は71名（男性48名、女性

23名）、平均年齢19.48歳（ $SD=0.82$ ）であった。有効回答率は87.65%であった。

実験計画

独立変数を集団同一視、所属集団（内集団 vs. 外集団）および行動価（援助行動（好ましい行動）vs. 恐喝行動（好ましくない行動））、従属変数を行動に対する肯定的および否定的態度、および行動に対する印象とする、3要因参加者間計画を用いた。この実験計画に基づき、以下のように質問紙を構成して質問紙調査を行った。

各水準の操作に関する手続き

質問紙において、「新聞記事」とされたシナリオを呈示した。呈示の目的は、自身の所属集団に対するアイデンティティの程度の違いが、自身と同じ集団（内集団）および自身と異なる集団（外集団）のメンバーによる同じ行動の評価にどのような影響を及ぼすかについて検討を行うためであった。上記に従い合計4条件の新聞記事シナリオを用意した（シナリオの詳細については後述）。

所属集団 「新聞記事」として呈示されたシナリオの登場人物の属性（関東地区の大学の学生 vs. 関西地区の大学の学生）が、調査対象者のもっとも長く居住した都道府県と一致する場合は、シナリオの登場人物を「内集団」、一致しない場合は「外集団」として扱った。なお、調査対象者のうち関東地区および関西地区に当てはまらなかった都道府県出身者8名を分析より除外した。調査対象者は「内集団」（ $n=37$ ）、「外集団」（ $n=34$ ）のいずれかに割り振られた。

行動価 「援助行動」、「恐喝行動」の2水準が設けられた。援助行動には登場人物が男子児童を救助し表彰された内容を、恐喝行動には市内に住む会社員に対し刃物を用いバイクを奪い取り逮捕された内容をそれぞれ用いた。

質問紙構成

集団同一視尺度 実験操作に先行し、所属集団に対する同一視を測定するために集団同一視尺度（Karasawa, 1991）を用いた。本尺度は、内集団

メンバーへの同一視を測定する「member」(4項目)と、集団そのものへの同一視を測定する「group」(8項目)の2つの下位尺度から構成される計12項目の尺度である。

本調査においては、項目9の「あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が〇〇に属していることに、よくふれる方ですか?ふれない方ですか?」を削除の上で用いた。削除理由は、上記項目以外は態度を尋ねる項目だが、当該項目は具体的な行動を尋ねる項目であり、具体的場面に合致しない調査対象者には適切ではないと判断したためであった。

本研究では上記11項目につき内的整合性の検討を行ったところ、 $\alpha = .80$ と高い内的整合性が確認された。そのため、本研究では集団同一視尺度を次元性の高い尺度と判断し、以下においては11項目から構成される単一の尺度として扱うこととした($M = 3.60$, $SD = 0.90$)。

本尺度は、集団成員が自らを所属集団の一員として同一視させるプロセスに着目して、集団への同一視の程度を測定するよう作成されている。各項目の評価には7段階を用い、各項目の合計得点が高いほど、所属集団に対する同一視の程度が高いと評価される。「あなたとあなたの所属集団(大学)との関係について次の質問に教えてください。最もよく当てはまる数字をそれぞれ1つずつ選び、○で囲んでください。」と教示のうえ、回答を求めた。各項目は、Karasawa (1991)に従い採点された。なお、本尺度はKarasawa (1991)にて因子的妥当性・構成概念妥当性が確認されていた。

4条件のシナリオ 質問紙に「新聞記事」として呈示されたシナリオは、新聞記事の記載方法を参考に調査者によって作成されたものである。本シナリオでは「関東地区の学生が行った援助行動」、「関東地区の学生が行った恐喝行動」、「関西地区の学生が行った援助行動」、「関西地区の学生が行った恐喝行動」の4条件が用意された(Table 1)。

シナリオの登場人物の行動に対する肯定的および否定的態度 シナリオの登場人物の行動に対す

る肯定的および否定的態度を測定するために、各項目が調査者によって作成された。作成された項目は、「肯定的な態度」および「否定的な態度」について、「友人間」および「SNS」でどの程度共有したいかを7段階(1=全く共有したくない~7=とても共有したい)で評定するものであった。なお、本研究では肯定的態度を「ハッピーな気持ち」、否定的態度を「とんでもないという気持ち」とした(Table 2)。なお、本研究では、否定的な態度がヘイトスピーチにより近いものと想定した。

シナリオの登場人物に対する印象 シナリオの登場人物に対する印象を測定するために、特性形容詞尺度(林, 1978)を用いた。本尺度は「消極的な——積極的な」など形容詞対20項目で構成されており、どちらに近いかをSD法を用いて7段階で評定するものであった。この尺度は、他者と接したときに相手がどの次元に関わるパーソナリティ特性を強く表出しているかを測定するために用いるもので、対象とする相手の印象が、与えられた形容詞対のどちらにどれだけ近いかに回答し、対象人物への印象を定量的に測定するものである。各項目は、林(1978)に従い採点された。なお本尺度は、林(1982)にて信頼性および妥当性が確認されていた。なお、本研究では、シナリオ登場人物の印象評定が否定的なほどヘイトスピーチに近いものと想定した。

人口統計学的変数 学科、学年、性別、年齢および現在までもっとも長く居住した都道府県について尋ねた。

調査手続き

質問紙は、既述の4条件の調査対象者数がほぼ等しくなるようにシャッフルを行ったうえで調査対象者に配付された。質問紙配付後に書面と口頭において研究目的が部分的に説明され、同意した者のみが質問紙に回答した。また本調査では、予め本来の研究内容を伝えることで、回答に予期せぬバイアスが生じる可能性が考えられたため、本調査は研究目的を一部伏せた上で行った。それにともない、回答終了後にデブリーフィングを実施

Table 1
呈示された新聞記事シナリオ

| 関東・援助行動 |
|---|
| 〇〇県警は、昨年8月に川で溺れていた児童を救助したとして、関東地区の大学生3人に感謝状を送った。〇〇県警によると、昨年8月午後2時頃、△△市内の川に当時小学1年の男子児童2人が転落した。溺れている2人を、釣りをしていた3人が発見。男子児童2人を岸に引き上げた。その内、男子児童1人は呼吸が止まっていたため、救急隊が来るまで心臓マッサージを行ったという。贈呈式では署長から3人に感謝状が手渡された。助けた関東地区の学生の1人は、「子ども達が全員無事だったと聞き、安心した」と話した。 |
| 関東・恐喝行動 |
| 〇〇県△△市で昨年8月、男性から原付バイクを奪い取ったとして、〇〇県警は関東地区の大学生3人を傷害や暴行、恐喝、県迷惑行為防止条例違反の容疑で書類送検した。〇〇県警は、昨年8月、△△市内に住む男性(18)を刃物で脅して原付バイクを奪い取ったとして、同市内の大学生3人を傷害や暴行、恐喝、県迷惑行為防止条例違反の容疑で今月5日までに逮捕し、調べを進めていた。男性と逮捕された関東地区の大学生はいずれも同じ中学の卒業生で、男性と原付バイクの貸し借りを巡ってトラブルになり、犯行に及んだ疑いがあるとしている。 |
| 関西・援助行動 |
| 〇〇県警は、昨年8月に川で溺れていた児童を救助したとして、関西地区の大学生3人に感謝状を送った。〇〇県警によると、昨年8月午後2時頃、△△市内の川に当時小学1年の男子児童2人が転落した。溺れている2人を、釣りをしていた3人が発見。男子児童2人を岸に引き上げた。その内、男子児童1人は呼吸が止まっていたため、救急隊が来るまで心臓マッサージを行ったという。贈呈式では署長から3人に感謝状が手渡された。助けた関西地区の学生の1人は、「子ども達が全員無事だったと聞き、安心した」と話した。 |
| 関西・恐喝行動 |
| 〇〇県△△市で昨年8月、男性から原付バイクを奪い取ったとして、〇〇県警は関西地区の大学生3人を傷害や暴行、恐喝、県迷惑行為防止条例違反の容疑で書類送検した。〇〇県警は、昨年8月、△△市内に住む男性(18)を刃物で脅して原付バイクを奪い取ったとして、同市内の大学生3人を傷害や暴行、恐喝、県迷惑行為防止条例違反の容疑で今月5日までに逮捕し、調べを進めていた。男性と逮捕された関西地区の大学生はいずれも同じ中学の卒業生で、男性と原付バイクの貸し借りを巡ってトラブルになり、犯行に及んだ疑いがあるとしている。 |

Table 2
シナリオの登場人物に対する態度を評定する項目

| |
|--|
| この話を友達に知らせて、「ハッピーな気持ち」を共有したい。 |
| この話を友達に知らせて、「とんでもないという気持ち」を共有したい。 |
| この話を SNS でみんなに知らせて、「ハッピーな気持ち」を共有したい。 |
| この話を SNS でみんなに知らせて、「とんでもないという気持ち」を共有したい。 |

し、本研究の目的と調査手続きについての詳細が説明された。その後、再度調査に協力できるかを確認し同意した対象者の回答のみを回収した。

倫理的配慮

質問紙配付時に、質問紙表紙の文章ならびに口頭により、質問紙の構成内容、調査に要する時間、回答に正解や不正解はないこと、無記名式で回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答は本来の研究目的のみに使用されること、回答は研究終了後厳重に保管され、保管

期間終了後、適切に廃棄されること、回答は任意であり評価や成績には一切関係がないこと、質問には一部に心理的侵襲性の高い内容や項目があり不快感が生じる可能性があること、途中で回答を中止しても問題のないことが示され、これらに同意する者のみが調査に回答した。また、既述のように、本調査は一部研究目的を伏せた上で行っており、回答終了後にデブリーフィングを実施した。その後、再度調査に協力できるかを確認の上で回答を回収した。なお、本研究は江戸川大学社会学部人間心理学科「人を対象とする研究」倫理

審査小委員会の審査承認後に実施された（承認番号：A2019-045）。

に有意な差はみられなかった（Table 3）。

結果

各変数の記述統計量

各変数の記述統計量を求め記載した（Table 3）。

所属集団×行動価の4条件における 集団同一視得点の平均値の差の検定

所属集団×行動価の4条件における集団同一視得点の平均値の差を検討するため分散分析を実施した。その結果、各条件において集団同一視得点

集団同一視を調整変数とした 重回帰分析による検討

集団同一視、所属集団および行動価が、肯定的・否定的態度および印象に及ぼす影響を検討するため、HAD17を用いて以下のように強制投入法による重回帰分析を行った（Table 4）。

肯定的態度を目的変数とする重回帰分析結果

集団同一視を調整変数、所属集団（0 = 内集団，1 = 外集団）、行動価（0 = 援助行動，1 = 恐喝行動）、性別（0 = 男性，1 = 女性）および集団同一視を説明変数、肯定的態度のうち「対人場面でハッピーな気持ちを共有したい」を目的変数とする

Table 3
各変数の平均値（SD）および集団同一視を従属変数とする2×2の分散分析結果

| | 対人肯定的 態度 | 対人否定的 態度 | SNS 肯定的 態度 | SNS 否定的 態度 | 印象評定 | 集団同一視 ($\alpha = .80$) |
|-----------------------|-------------|-------------|---------------|---------------|-------------|-----------------------------|
| 内集団・援助行動 ($n = 19$) | 3.95 (1.51) | 2.89 (1.20) | 2.89 (1.70) | 2.53 (1.39) | 4.72 (0.54) | 3.53 (0.75) |
| 内集団・恐喝行動 ($n = 18$) | 1.67 (1.19) | 3.28 (1.99) | 1.78 (1.35) | 2.67 (1.71) | 3.10 (0.54) | 3.50 (1.10) |
| 外集団・援助行動 ($n = 17$) | 3.24 (1.68) | 2.88 (1.45) | 2.71 (1.65) | 2.71 (1.53) | 4.76 (0.46) | 3.78 (0.96) |
| 外集団・恐喝行動 ($n = 17$) | 1.53 (0.87) | 3.65 (1.54) | 1.41 (0.71) | 2.53 (1.70) | 3.05 (0.50) | 3.61 (0.79) |
| 分散分析結果 | | | | | | $F_s < 1.25$ $p_s > .26$ |

Table 4
集団同一視を調整変数とした重回帰分析結果

| | 対人肯定的 態度 | 対人否定的 態度 | SNS 肯定的 態度 | SNS 否定的 態度 | 印象評定 |
|-----------------------|-------------|-------------------|---------------|---------------|----------|
| 集団 (0 = 内集団, 1 = 外集団) | -.154 | .026 | -.103 | .008 | -.006 |
| 行動価 (0 = 援助, 1 = 恐喝) | -.617*** | .214 [†] | -.400*** | .012 | -.840*** |
| 性別 (0 = 男性, 1 = 女性) | .025 | -.027 | .113 | .050 | .086 |
| 集団同一視 | .203* | .317** | .106 | .053 | .044 |
| 集団同一視×所属集団 | .101 | -.105 | .098 | .091 | -.019 |
| 集団同一視×行動価 | -.015 | -.005 | .167 | .131 | .006 |
| 集団同一視×性別 | -.151 | .093 | -.095 | .019 | .060 |
| R^2 | .388*** | .057 | .131* | -.086 | .718*** |

注：数値は標準化回帰係数 (β)。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$ 。

重回帰分析を行ったところ、行動価および集団同一視の主効果が有意であった ($\beta = -.617, p < .001$; $\beta = .203, p < .05$)。また決定係数も有意であった ($R^2 = .388, p < .001$)。すなわち、恐喝行動に比べて援助行動を行った場合、および集団同一視の得点が高い場合、対人場面でハッピーな気持ちを共有したいとする態度が高かった。

同様に、「SNSでハッピーな気持ちを共有したい」を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、行動価の主効果が有意であった ($\beta = -.400, p < .001$)。また決定係数も有意であった ($R^2 = .131, p < .05$)。すなわち、恐喝行動に比べて援助行動を行った場合、SNSでハッピーな気持ちを共有したいとする態度が高かった。

否定的態度を目的変数とする重回帰分析結果
否定的態度のうち「対人場面でとんでもないという気持ちを共有したい」を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、行動価および集団同一視の主効果が有意傾向もしくは有意であった ($\beta = .214, p < .10$; $\beta = .317, p < .01$)。すなわち、援助行動に比べて恐喝行動を行った場合、および集団同一視の得点が高い場合、対人場面でとんでもないという気持ちを共有したいとする態度が高かった。

同様に、「SNSでとんでもないという気持ちを共有したい」を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、有意な説明変数はみられなかった。

印象評定を目的変数とする重回帰分析結果
印象評定を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、行動価の主効果が有意であった ($\beta = -.840, p < .001$)。また決定係数も有意であった ($R^2 = .718, p < .001$)。すなわち、援助行動に比べて恐喝行動を行った場合、印象評定の値が低く悪印象であった。

以上より、対人場面およびSNS上での肯定的・否定的態度および印象評定に、集団同一視および行動価（援助行動 vs. 恐喝行動）による違いがみられたが、所属集団による違いはみられなかった。また、いずれの分析においても、集団同一視との交互作用効果および性別の主効果はみられなかった。さらに、所属集団×行動価の交互作用効

果についても検討したが、結果は有意ではなかった。以下においては、集団同一視と行動価の主効果を中心に考察することとする。

考 察

本研究の目的は、社会的アイデンティティの指標として所属集団への自己同一視の程度を測定し、その程度の違いが内集団または外集団成員の行った同じ行動（社会的に好ましい行動、もしくは社会的に好ましくない行動）の印象評定にどのような違いをもたらすかを検討することであった。またヘイトスピーチが対人場面において直接的に、あるいはSNSなどを媒介して拡散されている現実にも着目し、当該行動に対する対人場面およびSNS上での肯定的および否定的態度に違いが生じるかについても検討した。仮説は、集団同一視が高い場合に内集団バイアスが強く働くことで、内集団の行った好ましい行動をより肯定的に評価し、外集団の行った好ましくない行動をより否定的に評価する、というものであった。

検討の結果、対人場面およびSNS上での肯定的・否定的態度および印象評定に、集団同一視および行動価による違いがみられたが、所属集団による違いはみられなかった。また、いずれの分析においても、交互作用効果および性別の主効果はみられなかった。よって、仮説は部分的に支持されるにとどまった。

以下においてそれぞれの結果について考察する。

集団同一視を調整変数とした場合の各目的変数への影響について

肯定的態度を目的変数とする場合 「対人場面でハッピーな気持ちを共有したい」を目的変数とする重回帰分析を行った結果、行動価および集団同一視の主効果が有意であった。すなわち、恐喝行動に比べて援助行動を行った場合、および集団同一視の得点が高い場合、対人場面でハッピーな気持ちを共有したいとする態度が高かった。

また、「SNSでハッピーな気持ちを共有したい」

を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、行動価の主効果が有意であった。すなわち、恐喝行動に比べて援助行動を行った場合、SNSでハッピーな気持ちを共有したいとする態度が高かった。

以上より、集団同一視は肯定的態度のうち、「対人場面」での態度には影響していたが、「SNS場面」には影響していないことが確認された。このような結果が得られた原因として、たとえば、不特定多数の対象に対して発信されることを前提とするSNS場面に比べると、対人場面はより狭い密接な人間関係であるため、対人場面における態度の共有願望がSNS場面に比べ重視されるといったことが考えられる。そのため、集団同一視の程度が高い者が、自身の同一視する集団やそのメンバーとの間で肯定的な気持ちを共有したいとする態度が高くなったと考えることができる。

また、恐喝行動に比べて援助行動を行った場合、対人場面、SNS場面ともにハッピーな気持ちを共有したいとする態度が高かった。このような結果が得られた原因として、援助行動は社会通念上肯定的な行動と捉えられることが挙げられる。そのため、肯定的な気持ちを共有したいとする態度が高くなったと考えられる。

否定的態度を目的変数とする場合 「対人場面ととんでもないという気持ちを共有したい」を目的変数とする重回帰分析を行った結果、行動価および集団同一視の主効果が有意傾向もしくは有意であった。すなわち、援助行動に比べて恐喝行動を行った場合、および集団同一視の得点が高い場合、対人場面ととんでもないという気持ちを共有したいとする態度が高かった。

以上のように、集団同一視の得点が高い場合、対人場面で否定的な気持ちを共有したいとする態度が高かった結果が得られた原因として、肯定的態度の場合と同様に、自身の同一視する集団やそのメンバーとの間で否定的な気持ちも共有したいとする態度が高くなったことが考えられる。

また、援助行動に比べて恐喝行動を行った場合、対人場面で否定的な気持ちを共有したいとする態度が高かった。恐喝行動は社会通念上否定的

な行動と捉えられる。そのため、否定的な気持ちを共有したいとする態度が高くなったと考えられる。

また、「SNSでとんでもないという気持ちを共有したい」を目的変数とする重回帰分析を行った結果、行動価および集団同一視の主効果はみられなかった。すなわち、恐喝行動、援助行動のどちらにも、また集団同一視の程度に関係なくSNS場面で否定的な気持ちを共有したいとする態度に違いはみられないことが確認された。集団同一視の主効果がみられなかった原因として、肯定的態度と同様に、SNS場面における態度の共有願望は対人場面に比べ軽視されやすく、その結果SNS場面では集団同一視による共有願望を引き起こさず違いがみられなかったと考えられる。

また、行動価の主効果もみられなかった原因として、恐喝という否定的な行動が、必ずしもSNS場面における否定的な態度につながるものではなかったことが考えられる。そのため、SNSに散見される、ある行動に対する否定的な意見の拡散等には、集団同一視や行動価以外に、行動と意見の拡散を媒介する他の変数が存在している可能性にも着目する必要があるだろう。

印象評定を目的変数とする場合 印象評定を目的変数とする重回帰分析を行った結果、行動価の主効果が有意であった。すなわち、援助行動に比べて恐喝行動を行った場合、印象評定の値が低かった（悪印象であった）。このような結果が得られた原因として、態度の場合と同様に、恐喝行動は社会通念上否定的な行動と捉えられる。そのため、悪印象という結果になったと考えられる。

本研究の成果および今後の課題・展望

本研究の目的は、社会的アイデンティティの指標として所属集団への集団同一視の程度を測定し、その程度の違いが内集団または外集団成員の行った同じ行動（社会的に好ましい行動、もしくは社会的に好ましくない行動）に対する態度および印象評定にどのような違いをもたらすかを検討することであった。こうした検討を通して、外集団に対するネガティブな態度の顕在化が、社会的

アイデンティティの程度や評価対象者の行動の違いなど種々の条件によって異なるか検証することが最終的な目的であった。

検討の結果、所属集団の違いが、内集団または外集団成員の行った同じ行動に対する態度および印象評定に違いを生じさせないことが分かった。このことは、外集団に対するネガティブな態度の顕在化が、評定者自身の所属集団への同一視の程度と関連して生じている一方で、行為者の所属集団が必ずしも関連しているわけではないことを示唆する結果といえる。したがって、ヘイトスピーチといった外集団に対するネガティブな態度の顕在化の検討に際し、今後はさらに評定者側の特性（たとえば、個人志向性 vs. 社会志向性など）に着目する必要があるものと考えられる。

また本研究における結果は、外集団より内集団を有利にするような評価的・情動的・行動的な反応である、内集団バイアスが発生しなかったことを示しているとも考えられる。この結果の解釈として、内集団への同一視は内集団成員をポジティブに優遇・ひいきする「内集団ひいき」を生起させるが、外集団成員をネガティブに蔑視・攻撃する「外集団差別」は引き起こさないことが考えられる。縄田（2013）は、自分を好きだという理由で他者を嫌いになる必要がないのと同様に、内集団を好きという理由で外集団を嫌いになる必要はないとしている（cf. Smith & Henry, 1996）。この解釈に従えば、内集団への同一視の程度を示す集団同一視の程度が高いことが、外集団に対するネガティブな評価および態度である外集団差別にはつながらなかったと考えることができる。しかし一方で、内集団成員をポジティブに優遇・ひいきする「内集団ひいき」も本研究では確認されていないため、内集団ひいきが発生しなかった他の要因の存在を考慮してみる必要もあるだろう。

本研究では、現代社会において問題となっているヘイトスピーチなどにみられる外集団に対するネガティブな態度の顕在化と、行為者の集団成員性との関連性を明確に示すことはできなかった。しかし、内集団バイアスと関連する集団同一視や行動価（恐喝行動）との関連性は見出されていた

ことから、本研究は外集団に対するネガティブな態度の顕在化と集団成員性や集団同一視との関連性をさらに検討していくための足掛かりを築くことはできた。この点において意義があったものとする。

本研究における調査では、これまでもっとも長く居住した都道府県を回答してもらい、関東地区の都県内にもっとも長く居住している場合には関東地区を内集団、関西地区を外集団として、同様に、関西地区の府県内にもっとも長く居住している場合には関西地区を内集団、関東地区を外集団として扱った。その上で、シナリオにおいて関東地区、関西地区それぞれの大学に通う学生の行動を呈示し、集団同一視の程度、所属集団および行動価の違いが、呈示された行動の評価にどのような差異をもたらすかを検討した。

本研究で用いた手続き上の課題として、内集団と外集団を区別するカテゴリーとして関東地区と関西地区を設定し、もっとも長く居住した都道府県によって調査対象者をそのいずれかに割り振ることが挙げられる。この手続きでは、「自身は関東地区または関西地区の都府県に長く居住していた」ことが、「自身はその関東地区または関西地区の人間だ」という所属意識を持つことを前提としているといえるが、この部分については十分な検討がなされていなかった。したがって、上記の手続きには限界があると考えられる。

たとえば、内集団、外集団の設定に地域や地区以外の、所属意識をより直接的に反映でき、かつ現代社会におけるヘイトスピーチに代表されるような差別的な行動の検討にも適用可能な具体的なカテゴリーを導入し、それを踏まえた研究を行っていくことが必要となろう。

以上のような検討を通して、今後は社会的アイデンティティが関連するさまざまな事象における反応バイアスについて明らかにしていくことが期待される。

引用文献

- 橋内武（2018）. ヘイトスピーチの法と言語 社会言語科学, 20 (2), 3-18.
林文俊（1978）. 対人認知構造の基本次元についての一考

- 察 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 25, 233-247.
- 林文俊 (1982). 対人認知構造における個人差の測定 (Ⅷ) —— 認知者の自己概念および欲求との関連について —— 実験社会心理学研究, 22, 1-9.
- Hewstone, M., Rubin, M., & Willis, H. (2002). Intergroup bias. *Annual Reviews*, 53, 575-604.
- Hogg, M.A. (1992). *The social psychology of group cohesiveness: From attraction to social identity*. Harvester Wheatsheaf.
- (ホッグ, M.A. 廣田君美・藤澤等 (監訳) (1994). 集団凝集性の社会心理学——魅力から社会的アイデンティティへ——)
- Hogg, M.A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.
- 法務省 (2019). ヘイトスピーチに焦点を当てた啓発活動 法務省 Retrieved from http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken04_00108.html (2021年8月20日最終閲覧)
- 市川正人 (2015). 表現の自由とヘイトスピーチ 立命館法学, 2, 122-134.
- 池上知子 (2014). 差別・偏見研究の変遷と新たな展開——悲観論から楽観論へ—— 教育心理学年報, 53, 133-146.
- 柿本敏克 (1997). 社会的アイデンティティ研究の概要 実験社会心理研究, 37, 97-108.
- 柿本敏克 (2001). 社会的アイデンティティ理論 山本眞理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介 (編) 社会的認知ハンドブック (pp. 120-123) 北大路書房
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- 縄田健悟 (2013). 集団間紛争の発生と激化に関する社会心理学的研究の概観と展望 実験社会心理学研究, 53, 52-74.
- Riek, B.M., Mania, E.W., & Gaertner, S.L. (2006). Intergroup threat and outgroup attitudes: A meta-analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 336-353.
- Smith, E. R., & Henry, S. (1996). An in-group becomes part of the self: Response time evidence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 635-642.
- 杉浦仁美・坂田桐子・清水裕士 (2015). 集団間と集団内の地位が内・外集団の評価に及ぼす影響——集団間関係の調整効果に着目して—— 実験社会心理学研究, 54, 101-111.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin, & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Monterey: Brooks/Cole.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.
- (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見——自己カテゴリー化理論—— 誠信書房)
- 山岸俊男 (監修) (2011). 徹底図鑑 社会心理学 新星出版社

付記

本稿は、第二著者が第一著者の指導のもとで人間心理学科2019年度卒業論文として提出した論文をもとに、第一著者が再分析、加筆・修正および再考察を行ったものである。また、本研究は日本心理学会第85回大会にて発表された。

The effects of group identification and behavioral values on attitudes and impressions of ingroup and outgroup actors

Tomofumi Owada & Shinya Watanobe

Abstract

In recent years, hate speech against outgroups have become a serious social problem. To shed light on these social issues, this study examined how differences in the degree of group identification and behavioral values affect attitudes and impression ratings of actors in the ingroup or outgroup. At the time, a questionnaire investigation was conducted on 81 undergraduates (32.4% female). In this study, group identification (mean-centered), groups (ingroup vs. outgroup) and behavioral values (helping behavior vs. blackmail behavior) was used for predictor with between-subjects design. As a result of investigation, there were differences in the positive or negative attitudes and impression ratings toward the actors on the interpersonal situations and SNS due to group identification and behavioral values. But there was no difference depending on the groups to which the actors belonged (ingroup vs. outgroup). This result means that while the manifestation of negative attitudes towards outgroup is associated with the degree of group identification to the participants' own group, the actor's group is not necessarily related with negative attitudes towards outgroup. Therefore, this study suggests that when considering the manifestation of negative attitudes toward outgroups such as hate speech, it is necessary to pay more attention to the characteristics of the raters (e.g., individual orientation vs. social orientation).

Keywords : social identity theory, group identification, ingroup, outgroup, hate speech

